New Face

倉橋 貴純 (地球環境フロンティア研究センター)

御無沙汰しておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか、倉橋貴純と申します、昨春までは旧姓の中村で大変お世話になりましたが、3月に結婚し姓が倉橋となりました。惑星科学会での報告が遅れ、大変失礼致しました。今後、日本語表記では新姓を用いて「倉橋貴純」を名乗ります。英語表記の場合は、思案した結果、Takasumi Kurahashi-Nakamuraとすることに決めて、既に使い始めています。名字が変わる機会というのはめったにないものですから、中々新鮮な気分を味わうことができていますが、最近では旧姓のほうが違和感が強くなってきました。惑星科学会の皆様におかれましては、新姓で呼ぶことに若干抵抗があるかもしれず(紛らわしいという可能性も!?)ご迷惑をおかけしますが、今後もどうぞよろしくお願い致します。

さて、2004年3月に、東京大学大学院理学系研究科において無事学位を取得いたしました。学位論文のタイトルは、"Evolution of the Surface Environment of Mars: Numerical Studies on the Climate System"です。これは、学部4年生以来続けてきた研究をまとめたもので、火星の気候システムの安定性や進化を、数値モデルを用いて調べたものです。この研究を行ってきた6年間で、実にたくさんのことを学ぶことができました。それこそ、論文の探し方に始まり、計算機の使用、学会への参加、皆の前での発表の仕方、議論の仕方、論文の書き方、あるいは、様々な研究のスタイルや思想、身の振り方、などなど・・・あまりに多くて、ここでその全てを紹介することはとてもできません。それもそのはず、やることなすこと全部初めてだったんですから。その全てを支えてくださった田



近英一先生には感謝してもしきれません。また、4年 生の時に初参加して以来、毎年僕に刺激と教示を与え てくれた惑星科学会と会員の皆様に、精一杯の感謝を したいと思います。

ここで、僕が研究の世界に進み学位を取得するまで に至った経緯について紹介させて頂きたいと思いま す. ルーツを求めて遡れるだけ遡れば、最初は、幼少 時に母が買い与えてくれた図鑑になるのではと思いま す、15巻ほども持っていたと思いますが、自然と「地球」 と「宇宙」の2巻を頻繁に読んでいました。不思議な ことに、天文学の分野に相当するような恒星に関係す る項にはあまり興味を覚えず、「地球」と「『宇宙』の うち惑星を扱った項目」に特に興味を持っていたとい うのが、未来を予言しているようで面白いところです. 小学校では夏休みの自由研究のテーマに惑星や地球の ことを取り上げたりしました。中学校では、3年間「地 学」という科目の授業があり、とても楽しい思いをし ました. 先生がなかなか高度な授業を展開し, ジオイ ド, 重力補正, 結晶分化作用, コリオリカ, 大気の温 度減率(乾燥・湿潤), 軌道離心率, といった概念ま で教えてくれました. その先生とは一昨年の合同大会 で約10年ぶりの再会を果たすことができ、僕の現状を とても喜んでくれたのが嬉しかったです。この先生と

の出会いがなければ、ひょっとして僕は別の道に進んでいたかもしれません。高1のとき、学校で配布された簡単な大学の案内を目にする機会がありました。その頃から理系に進むつもりでいたので、理学部や工学部に所属する学科を眺めていると、目に止まったのが理学部の地球惑星物理学という文字でした。もちろんその時は強く決心したわけではなく、「ああ僕ならこれだな」程度に思ったのですが、結局、東大で駒場から本郷に進学する際(学部3年進級時)に専門学科を選ぶときまで気が変わりませんでした。

ところが、申請書類の希望学科第一希望の欄に「地 球惑星物理学科」と書く寸前まで来た時のことです. 地学科(地質学系の学科です)に進学していたサーク ルの先輩が、たまたま「一度本郷の雰囲気を見に来て はどうか」と誘ってくださり、地学科の先生方と話を する機会をセットアップしてくれました. 僕は、第一 希望の地球惑星物理学科とは違うものの貴重な体験に なるだろう(それに名前も似ているし)と考え,希望 提出直前でしたが本郷の理学部五号館を訪問すること にしました. そこで、田近先生と運命的な出会いを果 たすのです。実は、僕は訪問直前まで別の先生と会う 約束になっていました. しかし, その先生の訪問予定 日のご都合がつかなくなり、先輩が急遽ピンチヒッタ ーとして(失礼!) 田近先生を紹介してくださったの です。突然現れた2年生のために、3時間もの時間を割 いてくださった先生には頭が下がる思いです。その時 先生がおっしゃった言葉の中に大変印象的なものがあ りました, それは, 「理想的には, 地質学的手法も地 球物理学的手法も、どちらかだけでは片手落ちであっ て、2つを両輪として機能させることが重要なのだ」 といった趣旨の言葉でした。しかも田近先生は、地球 物理学科をご卒業され今は地質学科で先生をなさって いる、そのことの体現者だったのです、僕は当時の僕 なりに非常に感銘を受け、次のように考えました.「物 理や数学は,言ってしまえば本で独学できる.しかし, フィールドに出かけたり顕微鏡をのぞいたりは、大学 のカリキュラムでなくては無理だ.」そこで僕は土壇 場で、本命で地球惑星物理学科を目論んだまま実際の 進学先を地学科にしたのです。

地学科に進学した僕は, しかし地球物理学と疎遠に ならないように授業の半分は地球惑星物理学科のカリ キュラムから選択し、なるべく両方の感覚に身を置く ように努めました、4年生になると、指導教官として(予 定調和的に?) 田近先生のご指導を仰ぐことになり研 究を始めました。修士2年になるときには、地質学専 攻と地球惑星物理学専攻が合併し、地球惑星科学専攻 となりました. そして, 博士課程に進学する際に田近 先生の勧めがあり、とうとう僕は居室(大学院生室) を, 地質学専攻が存在していた五号館から地球惑星物 理学専攻が存在していた一号館へと移ることになった のです. こうして僕は、5年越しの本命であった地球 惑星物理学を中心とした環境へ身を移すことができま した、結果として、4年生以来五号館で3年、一号館で 3年を過ごしましたが、2つの環境で生活した経験はと ても有益だったと感じています.

月並みですが、人生とは縁だなぁと思います。また、縁とは不思議だなぁとも思います。公私にわたる貴重な出会い(田近先生と妻)を提供してくれた理学部五号館との縁は重要であったと思います。紹介してくださった先輩は今どこで何をしてるんでしょう・・・また、様々な環境に「実際に」身を置くことが大切だと知った学生時代でもありました。その場で日常を送らないと身につかないこと(有形・無形)って沢山あると思います。

そして、現在. 2004年4月以降は、海洋研究開発機構・地球環境フロンティア研究センターというところでポスドク生活を送っています。そこで、地球温暖化予測研究プログラムに所属し、阿部彩子さんの下、地球の古気候(氷期・間氷期サイクル)に関する研究を開始したところです。まだまだ知らないことが多く、日々勉強の毎日です。学振PDの採用内定を得ながら敢えてこちらを選択したことは多分に人を驚かせたようですが、新しく優れた研究環境のもと、今までとはまた違った刺激を受けながら充実した毎日を送ってお

ります.「地球、火星といった特定の星に限定されないスタンス」、「地質学的手法と地球物理学的手法の両輪」といった僕の抽象的理想を、実際の研究テーマや態度として具現することはなかなかに難しいと感じるようにはなりましたが、元来備わる楽観的性質に後押しされて、これからも前進していくでしょう.

最後になりましたが、改めて、惑星科学会の皆様にはお世話になりました。今後も、様々な研究の話で頭脳を刺激し、世間話で多いに盛り上がりたいですね。 どうぞよろしくお願い申し上げます。皆様の御健勝をお祈りいたします。